

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局

クリスマスと新年のご挨拶を申し上げます

仙台教区サポートセンター長 平賀 徹夫 司教

仙台教区震災復興支援活動にご参加頂いております皆様に、クリスマスと新年のご挨拶を申し上げます。今年は大震災から丸三年となりますが、これまでのご支援・ご協力、本当に有難うございました。被災という苦難を契機としてですが、私たちがますます一つにつながる、文字通り災いを転じて福となすために、今後ともご支援をよろしくお願い致します。

この支援活動は、大震災発生から6ヶ月を第一期（緊急避難所期）、その後の1年半を第二期（仮設住宅期）、そして今は第三期（復興住宅への移行期）として行ってきました。「4→6, 45計画」は第一期から継続しているものですが、内陸部（国道4号線沿いの教会）から津波被災地（国道6号、45号沿いの教会）への支援・交流・連帯を推し進める活動の呼びかけです。仙台教区の皆さんはこれによく応えてくださっています。青森県内陸部の教会からは岩手県沿岸北部の地域に出かけ、岩手内陸部からは宮古、釜石、大船渡、気仙沼へ、宮城県はたとえば仙台の教会は石巻、塩釜、亶理等の被災地とつながり、福島県も（CTVCと共に）中通りや会津から原町やいわきへと、支援・交流を深めています。

仙台教区は今年の4月から「地区制」をとることにしました。教区の中の教会（小教区）をグループ分けにし、八つの地区とします。青森県は西部と東部となりますが、岩手、宮城、福島県のほとんどの地区は内陸部と太平洋沿岸部がつながっています。「4→6, 45計画」による交流・支援・連帯がますます容易となることを期待したいと思います。

では、新しい年の初めにあたり、神様からの祝福が皆様の上に豊かに注がれますようにお祈りいたします。

~~~~~  
今回は、クリスマス会を開いたカトリック松木町教会、ドイツからマリア像が贈られたカトリック釜石教会、そして2011年11月から現在まで仮設住宅で継続的に「味噌づくり」活動をしているカトリック塩釜教会からご報告をいただきました。

厳しい寒さが続いておりますので、皆さまお身体にお気をつけてお過ごしください。

### 繋がりと感動に満たされた仮設でのクリスマス会

カトリック松木町教会 鈴木 キミ子

『わたしたちは、この世に望まれて生まれてきた大切な一人ひとりです』（マザーテレサの言葉を受けて）。これは、今年の手づくりクリスマスカード。裏には、ボランティアさんへ手書きのメッセージを書いていただき、プレゼントへ添えました。

12月14日（土）、3回目となるクリスマス会。「ごらんよ空の鳥」を全員で歌って開会し、照明を落としてキャンドルサービスと松木町教会学校の子供達の聖劇。劇終了と同時に部屋を明るくして「あめのみつかい」の全員合唱をしました。今回は、加えて二組のコーラスグループがこの会をさらに盛り上げて下さいました。

はじめに、「福島メサイア市民合唱団」の混声合唱団18名が、狭いステージの中、世界中の人々が昔から勇気と希望を与えられてきたというメサイアを歌って下さいました。また、「あわてんぼうのサンタクロース」では、楽器が配られ、歌に合わせて鳴らすという楽しい趣向でした。

もう一組のコーラスは、カリタス修道女会「スモールクワイヤ」の8名です。このグループには、プログラムの最後の楽しみとして歌っていただきました。



福島メサイア市民合唱団



スモールクワイヤ

クリスマス会のアトラクションでは、「しずけき」に合わせた白いドレスの清らかなフラダンス。いつものフラダンスとは全く違った感じの雰囲気、箸も止まってしまうという素晴らしいものでした。そして、やはり浪江町と言えば民謡。「相馬二編返し」などなど。91歳の男性の力強い声にはびっくりでした。やがて二人のサンタさん(松木町教会のイエジ神父とCTVCの漆原さん)の登場です。サンタさんからプレゼントを手渡された皆さんは、ホッコリとした嬉しそうな笑顔に。さらに松木町教会信徒の皆さんが協力して下さった数々の菓子やくだものもテーブルに盛りつけられ、ボランティアに参加できなかった方々のお心も届けられたと思います。

いよいよ「スモールクワイヤ」の出番です。シスター達の「被災地での祈りの歌」は天使のような歌声でした。数曲歌われた中でも特に『いのち』は、「生きてほしい、かけがえのないあなたの命」の思いが皆さんの心に届き、癒されたことでしょう。最後に「オーホリナイト」。しかし、拍手はいつまでも止まず、アンコールにこたえて「川の流れるように」を歌って下さいました。

会も終りに近づいた頃、「愛の支援グループ」が仮設のお母さんたちから教わって作った手づくり甘みそをプレゼントし、東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」を全員でガーベラの花(希望)を持って歌い、別れを惜しみながら閉会となりました。



私たちは、目に見えない放射能に不安を持ちながら生きています。ちょっとした優しさに触れて涙し、ちょっとした当たり前のことにも痛みを感じてしまう、これが、不安の中で生活している被災された者同士の心の繋がりになっているのかもしれない。

繋がりと感動に満たされたクリスマス会でした。感謝。



## ドイツからのマリア像

カトリック釜石教会 千田 榮

頬にあたる風が冷たい11月21日木曜日、ドイツから届いた木彫りのマリア像の祝福が、カトリック釜石教会で行われました。

マリア像は、ドイツ人の芸術家ルードビヒ・シューマッハー氏が東日本大震災の被害に遭われた方々を思い、一本の樫の木を彫って作製したもので、高さ約190cm、重さが550kgあります。マリア様が、幼子イエス・キリストを両手で包んでいます。

シューマッハー氏は、これまでも世界での争いなどが起きると、ご自分で祈りをこめてマリア像を彫り、贈っているそうです。

21日はドイツ大使館のシュテファン・ヘルツベルク首席公使、寄贈の仲介を下された仙台日独文化協会のウィルヘルム様、通訳の石川様の3人が釜石教会を来訪されました。信者やカリタス釜石のボランティアの皆さんと一緒に、ハルノコー神父様司式によるミサに与かりました。

ちょうどマリア様奉獻の日。偶然とはいえ、マリア像の祝福もとても意味のあることとも思えます。ともに釜石の復興を祈り、ともに喜びを伝えた時間となりました。



公使は「作者の思いを届けただけです。」とおっしゃいましたが、本当に被災された方々に伝われば…という思いを強く感じました。また、ミサの前には、ハルノコー神父様と昨年4月に訪れた箱崎地区を再訪されました。被災地の現状を大使館へ報告するそうです。

世界の方からの願いを受けながら、少しずつ私たちも街も元気になればいいと思えた一日でした。

## 味噌づくり

カトリック塩釜教会 溝田 知宏

12月4日は、東日本大震災発生から1000日目。各被災地では、震災犠牲者に対し鎮魂の祈りが捧げられている状況がマスメディアを通して伝わってきたと同時に、あの日あの時、塩釜教会の状況が蘇ってきた。当時、教会に入る国道は津波の影響で寸断され、教会に入ることは困難であった。また、情報も錯綜し、様々な誤報も流れていた。

その様ななかで、震災発生から2日後に主任司祭であったラシャペル神父の訃報が伝わり、教会全体が暗く重苦しい雰囲気陥ったことが今でも思い出される。悲しみに浸る暇もなく、慌ただしく塩釜教会は、仙台教区サポートセンターのボランティアの宿泊場所と活動拠点の第一号として動き出し、それが2011年9月末まで続いた。

その後、仙台教区平賀司教様から東日本大震災救援・復興活動に係る「新しい創造」基本計画第2期に向けての基本構想が発せられ、塩釜教会も新たに被災者に寄り添う心のケア「傾聴」活動に移行することとなった。しかし、当教会には傾聴の専門の方や経験者がいなく困惑していた。そのような時、塩釜市社会福祉協議会の指導の下、「味噌づくり」をとおして被災者とふれ合う機会を得ることができた。



参加者全員で集合写真



大豆をつぶす作業



余興

味噌づくりは、管理栄養士を教会に招き、試行錯誤のうえ、2011年11月から塩釜教会の北西部に位置する塩釜市の伊保石仮設住宅において、毎月1～2回のペースで実施（対象者は伊保石仮設住宅140世帯と近隣の塩釜ガス体育館仮設住宅27世帯）していたが小さな塩釜教会が単独で継続するのは難しく、翌年1月から東仙台教会信徒有志の協力を得て行った他、これまで塩釜教会と関わった全国ボランティアも加わり、2013年12月で味噌づくりは39回目となった。

当時から続けている方は、約39kgの味噌を作ったことになるし、皆様から美味しいと喜ばれている。毎回、東仙台教会の参加者が味噌づくりの参加報告書を記しているのので、その内容の一部を紹介する。

～～味噌づくり参加報告書（東仙台教会参加者）より～～

味噌づくり前日は、塩釜教会で4時間掛けて煮込んだ大豆を水切りし一晩放置。当日は、前日準備した大豆460gと麴340g、塩120gの割合で計測しながらビニール袋に入れる作業をスタッフ全員で行う。正午からの昼食は、自己紹介と情報共有を交えながらの楽しい時間となっている。

午後1時、伊保石仮設住宅集会室に集合し、味噌づくりの設営開始。鈴木俊子(東仙台教会)さんが血圧計を持参し、希望者順に血圧測定を行い、被災者からは喜ばれ好評を得ている。

午後2時、参加者が揃ったところで集合写真。体をほぐす軽い体操をしてから、「もしもしカメよ」を歌いながら小指と親指を交互に出す指体操後、いよいよ味噌づくりが始まる。

参加者のほとんどは、味噌づくりのベテラン。新しく参加された方には被災者自ら教え助け合っている姿が印象的。頃合いをみて麴と塩を配布する。仮設住宅の生活では、ストレスがたまるのか、作業に集中している。味噌の完成と同時に参加者からそれぞれ笑顔がこぼれて満足した状態が伺える。



午後3時、お茶会で被災者と奉仕者がお茶菓子を食べながら将来のことなど色々話が飛び出し話題が尽きない。その後、被災者と奉仕者による余興に会場が笑いと涙の渦に巻き込まれ被災者との楽しい時間が瞬く間に終わり、次回開催日程のお知らせで閉会となる。

参加者の「仮設住宅での味噌づくりが一番楽しく、また、見知らぬ方同士が味噌づくりを通じて知り合い、友人となってとても嬉しい」「汗をかきながら皆と一緒にする作業は楽しい。味噌は生活必需品なので、いくらあっても重宝している」「作業が単純で、気持ちも和やかにお喋りが出来て楽しい」などの感想と、笑顔で味噌を提げて嬉しそうに帰る姿がある限り、この「味噌づくり」は東仙台教会信徒有志や全国のボランティアの協力や支援をいただきながら、これからも継続していきたいと思っている。